

令和6(2024)年度  
人権擁護のための作品  
入賞作品集



近江八幡市人権尊重のまちづくり推進協議会

近江八幡市



## 人権擁護のための作品とは



近江八幡市人権尊重のまちづくり推進協議会では、すべての人が安心して「自分らしく」暮らせる社会の実現をめざし、あらゆる人権について考え、行動に移していけるよう、家庭・学校・職場・地域などで啓発活動を推進するため、毎年『人権擁護のための作品』としてメッセージ、ポスターおよび作文を募集しています。今年度は小・中学生から一般の部まで全107作品の応募をいただきました。

たくさんのご応募ありがとうございました。





## 2024 人権擁護のための作品入賞者

### ■メッセージ部門

#### 小学生低学年（1～3年）の部

（敬称略）

**特選** あなたもわたしもあの子も  
みんないいところあるんだよ

青山 梨夏（安土小学校2年）

**入選** 《わたしの家族》  
わたしの家族は3人身体が不自由です。祖母は足がわるく  
祖父は車イスです。兄はぜんそくです。自分たちでできるこ  
とはがんばりますがむりな事はたすけあいます。  
けんかもするけどよくしゃべる仲のよい家族です。

内堀 早成江（島小学校3年）

**入選** みんながえ顔になるように  
楽しい学校生活、楽しい人生をおくろう

松平 友里菜（桐原東小学校3年）

#### 小学生高学年（4～6年）の部

**特選** 「どうしたの？」一言で変わる 救いになる

塩山 結彩（金田小学校6年）

**入選** あなたのたった一言で きずつく人がいる  
言葉の重みを考えてね。

奥井 遥加（金田小学校4年）

**入選** その投稿 本名出して かけますか？

富士谷 健正（金田小学校6年）

#### 中学生の部

**特選** 何気ない言葉の一言に、傷つくことがある。  
それでも生きていけるのは、それ以上に温かい  
気持ちをくれる誰かがいるから。  
その誰かに僕はなりたい。

神山 蒼晴（安土中学校1年）

入選 考えて 一つの言葉で 傷つく心

福島 桔平 (安土中学校1年)

入選 見守りと 見て見ぬ振りは また違う

西田 悠隼 (八幡西中学校2年)

## 一般の部

入選 多様性の時代 みんな一人一人が 大切なんだよ

川島 幹雄

## ■ポスター部門

### 《小学生低学年 (1~3年) の部》



特選 橋本 彩愛 (北里小学校3年)



入選 森 莉月 (金田小学校3年)



入選 大林 郁登 (武佐小学校1年)

《小学生高学年（4～6年）の部》



特選 橋本 結愛(北里小学校6年)



入選 平原 奈々(岡山小学校6年)



入選 蔵立 愛梨(安土小学校6年)

《中学生の部》



特選 内久保 愛生(八幡西中学校3年)



入選 玉木 舞乙(安土中学校2年)



入選 高田 裕也(安土中学校3年)

## ■作文部門 小学生高学年の部

### 特選 「ぼくが考える良い街」

松田 憐哉（八幡小学校6年）

ぼくは、仲よし学級に通っています。その理由は、ぼくが他の人より言葉や物事を理解するのに時間がかかるからです。でも、そんなぼくだからできることや考えられることがあると思います。

例えば、ぼくと似ているような人たちには、ゆっくり話す。ジェスチャーをまじえて伝える。やさしく伝えるなどができると思います。体が不自由な人たちには、点字ブロックの上を歩かない。電車やバスの優先席をゆずるなどができると思います。身近なことというと同じ仲よし学級の人たちに教えるときは優しく。全員と仲よく遊ぶ。その子のことを考えて話すなどをしています。こんな風に見えることは、たくさんあります。

しかし、なかには人を思いやるということができない人たちもいます。多目的トイレ、車イスマークのちゅう車場、かいだんなどのだんさに付いているスロープ、自動ドア、手すりなどのユニバーサルデザインやバリアフリーが多くなってきているのに、街中では思いやりが足りていない人たちを見かけることがよくあります。それを必要としている人たちがいることに気づいてほしい、必要としている人たちにつかってほしいと感じます。

だからこそ、ぼくはふだんから体の不自由な人たちにバスや電車の優先席をゆずるようにこころがけているし、点字ブロックの上を歩かないようにしています。そういったふだんからの思いやりやこころがけが、だれもがくらしやすい街をつくっていきと考えています。

思いやりやこころがけができない人たちが減って、それを当たりまえにできる人たちがどんどん増えていって、それが当たりまえのくらしやすい良い環境になっていったらいいなと思います。

そして、だれもが住んでいてよかったと思えるような街になっていったらいいなと思います。そのために、ぼくは今できることをがんばります。



## ■作文部門 小学生高学年の部

### 入選 「まほうの5文字、『ありがとう』」

西川 凜々（八幡小学校6年）

私は、人への思いやりや、やさしさについて考えました。思いやり、やさしさって、なんだろう？

私は5年生のときに、運動会のリレーの練習がありました。その時に、前にある小さなだんさに気付かず、ころんでしまいました。その時に、ある女の子が、もう少しで自分の出番なのにもかかわらず、私のほうへかけよって、「大じょうぶ？」やさしく声をかけてくれました。私の足からは少し血が出ていて、「血、出てるじゃん！いっしょに保けん室いこ？」と、言ってくれました。その時、私は思いました。「この子、やさしいな……」「自分をあと回しにしてまで、私のことを助けてくれているな……。」と、自分こんなことしたことある？私だったら「先生が助ける。」「他の子が助けてあげるでしょ。」「私が動く必要はない。」きっと、そう思うと思います。でも、この子はちがう。私とは大ちがいで、心がやさしく、思いやりのある子だ。その時、思いました。私、最低だ。助けに来てもらって、相手がどれだけ嬉しいか、逆に、助けに来てくれなかったら、どれだけ悲しいか、この時わかりました。人への思いやり、人へのやさしさが、どれだけ大切か。この事をキッカケに、私は変わろう、変わりたい、と思いました。まずは、身近なことから、やさしさや、思いやりを、相手にしてもらおうのではなく、自分から、やさしさ、思いやりを作っていく。ある日、友だちがふでばこを落としてしまい、中身が全て、外に出てしまいました。その時、助けてあげないと。と、思いました。えんぴつやけしごむなどを拾ってわたすと、「ありがとう」と言われました。その時、「ありがとう」とそう言われたただけなのに、心があったかくなりました。「ありがとうって、言われるだけで、こんなにうれしいんだ。ありがとう。その5文字は、まほうの5文字だなあ。」と、思いました。そこから、何かをしてもらったときは「ありがとう」まほうの5文字を使うように、しています。あの時、あの事がなかったら、私は変わっていませんでした。あの時助けてくれた子には、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとう。私を変わせてくれて。

私は、いつでも、やさしさと思いやりを大切に、そして、まほうの5文字、「ありがとう」その2つを大切にしないといけないということをわすれずに大切にしていきたいです。みなさんも、まほうの5文字を使ってください。そして、いつまでも、思いやりと、やさしさをわすれずに。



## ■作文部門 小学生高学年の部

### 入選 「個性あふれる未来へ」

川崎 萌生（北里小学校6年）

みなさんの周りに男女差別をされている人はいませんか。「男だから泣くな。」「女だから弱い。」と決めつけていませんか。

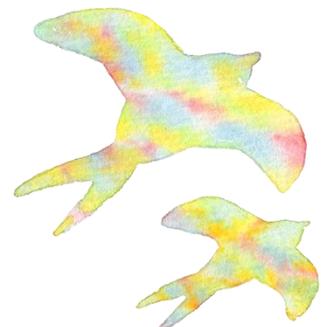
私は、学校に貼ってある「男らしい、女らしいは関係ない」というポスターを見て、世界には差別がたくさんある。少しでも減らせないかと思った時に、人権作文のぼ集があることを知り、少しでも私にできることがあると考え、この作文を書き始めました。

私の祖母は、「女の子なんだから料理を手伝いなさい。」とよく言います。しかし、私は女だから料理をするというのはおかしいと思います。私の母は、毎日働いており、父が料理をすることもあります。できる方がするというのが私の家のスタイルであり、私もこの考えに賛成です。私も大人になったら働き、お付き合いした人にも協力してもらえたらと思います。

今、日本が注目しているのが、「同性結婚」です。世界で三十七カ国しか認められておらず、日本でもまだ認められていませんが、認められれば、自分の意志が尊重され、その人らしく生きぬくことができ、差別は自然となくなっていくと思います。自分らしく生きることで、その人の長所も引き出され、今までその人が生かせていなかった力も発揮できるのではないかと考えます。

私は小学四年生の時に、人権について学び、「安心」「自信」「自由」をモットーに一人一人の気持ちにそばにいる人がよりそうこの大切さを教わりました。

今の世の中では、まだまだ男女差別というものがあり、男なのにスカートをはいているとジーンと見たり、あの人本当は男なんだってという場面をまだまだ目にします。このような世の中の人の目をなくすために、まず私ができることとして、祖母や友人が差別的な発言や行動をしていた場合、まちがっていることを正し、これは一人一人の個性で特別なことではないと伝えていきたいと思います。



## ■作文部門 中学生の部

### 特選 「私らしく」

中澤 心美（近江兄弟社中学校3年）

私には持病がある。幼少期から発症し、現在も続いている病気だ。持病のせいで諦めたことも、できなかったこともある。友だちや家族にも迷惑をかけたこともある。持病があるせいで何事にも消極的で無気力な自分がいる。

そんな私が、やってみたいと思えることに出会えた。それは中学受験をし、通いたいと思える学校に行くことだ。その学校では私が得意とする英語に力を入れられ、多様性を大切にする。地元の中学校とは少し違う。オープンキャンパスに参加するほど、行きたい気持ちは高まった。もちろん、地元の中学校に行けば仲の良い友達もいるし、家からも近い。好条件を逃してでも、行ってみたいと思える学校なのだ。

通ってみたい、そこで学んでみたいと強く思う反面、いつものように持病が邪魔をするのではないかと思う弱い気持ちが頭をよぎった。また消極的な自分が出てくる。やめてしまおうかと思ったが諦めきれなかった。

悩んだ挙句、思い切って次回のオープンキャンパスで包み隠さず、相談してみようと考えた。一人では不安なので母にも同席してもらった。自分の事をさらけ出すことに抵抗はあった。しかし、対応してくださった先生が「病気はあなたのせいではない。だから気兼ねをしなくていい。みんなと同じようにやりたいことをやれば良いよ。」と言ってくださった。この言葉に衝撃を受けた。心に突っかかっていたものが抜けたように感じた。そしてこの言葉は今もなお、心に残っている。この言葉をきっかけにその中学校に進学することに決意した。その言葉を胸に受験勉強に励み、入学することができた。

現在では、勉強はもちろん、体育祭や文化祭などの行事に積極的に参加している。全てができることばかりではないが、周りの協力を得ることでできていることもある。何よりも自分が病気のせいばかりにしていることに気づいた。自分の生まれ持った体をよく理解し、持病を持っているからといって落ち込んでいるだけでなく、自分の強みや個性を見つめ、どのように生かしていけば良いのかを考えていなかった。

今後は持病があるなしに関係なく、中学校生活で自分がやりたいと思ったことを全てやりきろうと考えて、このことを不幸だと思わず、少し見方を変えてみようと思う。残り少ない中学校生活。悔いの残らないように生活をしていきたい。多様性を尊重され、誰もが希望を持って自分らしく生きることが必要だ。

この持病は私の生活に影響を与えることもあるため、周囲の理解も必要だ。誰もが支え合い、理解合うことで偏見をなくし尊重し合える社会になると考える。病気の有無に関わらず、互いに人権を尊重し、優しさと思いやりを持って日々を過ごしたい。

## ■作文部門 中学生の部

### 入選 「誰もが住みよい社会に」

谷口 智香（八幡東中学校3年）

「私は動く」パラリンピックシンボルマークである「スリーアギトス」の意味である。困難なことがあってもあきらめずに、限界に挑戦し続けるパラリンピアンを表現している。今年は、パリパラリンピックが行われ、私は選手の活躍をととても楽しみにしている。

以前までの私は、障害をもつ人が出場する国際スポーツイベントであるという認識しか持っていなかった。しかし、それだけではない大きな意味があるのだと気付いたのは、東京パラリンピックの開会式で登場した「片翼の小さな飛行機」を演じた和合由依さんを見た時である。和合さんは両足などに障害があり、左手を動かすのが難しいそうである。それでも家族に自分の頑張る姿を見せたいという強い思いを持ち、大舞台上で生き生きと表現していたことに驚いた。片翼の小さな飛行機の悲しみや不安、喜びなどの感情の起伏、揺れ動きを表情や全身の動きで見事に表現していた。まさにコンセプトの「WE HAVE WINGS」そのものであると感じた。物語では、「大空を飛ぶことを夢見ながらも、翼が片方しかないために諦めている小さな飛行機が、周りの助けを借りながら自分にも本当は翼があるのだと気付いていく。最後には恐れずに大空へ飛び立つシーンで締めくくられる。主人公は、「心の翼」を得たのだ。私は、どんな困難があっても立ち向かおうとする姿に心を動かされた。私は、障害と聞くと、やりたくても一人ではできないことがあり、行動が制限されてしまうというイメージを持っていた。しかし、小さな飛行機は全く違った。和合さんは、インタビューの中で、次の様に語っている。「私たちには翼がある。みんな目標を決めて頑張っていくんだ。みんな本当に目標があってこそ、頑張っていくからこそ人の一生を表していると思いました。」この言葉から私は、障害があっても前を向き、チャレンジし続ける力強さを感じた。できないとあきらめるのではなく、できることを考え実践する。これは、障害の有無に関わらず、誰にでも共通する大切な「生き方」である。

では、私ができることは何なのだろうか。考えていた時に、小学生で出会った車椅子で生活をされている方の言葉を思い出した。「どうしても一人ではできないことがあるから、たくさんの人に支えられながら生活している。感謝を忘れないことが大切。」と語っておられた。私にできることは、困っている方を支えることである。感謝されたいからではない。私だって周りに支えられている。家族や友達などは、私が困っていたら快く相談に乗ってくれる。みんなが助け合うことに障害は関係ないと思う。大切なのは、「障害があるから」と決めつけないことだ。同じ目線で、相手の立場で物事を判断したい。

「WE HAVE WINGS」の「WE」には、私も入っている。自分の可能性を広げると共に、誰もが住みよい社会を目指して、平等に考え、行動できる人になりたい。

## ■作文部門 中学生の部

### 入選 「アグーナリーに参加して感じたこと」

田中 葵（近江兄弟社中学校 1年）

ぼくは、安土町のボーイスカウト蒲生第二団でボーイスカウト活動をしています。

夏休みの8月7日から8月11日まで、福島県の国立磐梯青少年交流の家でアグーナリーに参加しました。アグーナリーはどんな大会かというと、言語が違うスカウトや、障害のあるスカウトとの交流を通して、障害の有無に関わらず、相互に人格と個性を尊重し支え合う「共生する社会」を実現するという社会のニーズに応えることを目指して開催されている大会です。今回の大会には約900人の人が参加していました。ぼくは、たくさんの人と交流することができました。初めて出会う人たちとどうやって交流したらいいのかわからなくて、とりあえず大きな声で挨拶をしました。挨拶すると自分も気分が良くなるし相手も安心して声をかけてくれるようになりました。

海外の人とも交流することができました。お互いの言葉は違いましたが、ジェスチャーや、カタコトの英語でのやり取りで、交流することができました。会話ができなくても伝えたいという気持ち、相手のことを知ろうとする気持ちがあれば伝わるということが分かりました。磐梯の夕べという全員が参加する夕涼み会のような催しもありました。

とても楽しい催しで、海外の人も、障害がある人も、ぼくたちも、それぞれの違いを気にすることなく楽しむことができました。

このことで、違いなんてどうでも良く、その人とどう関わることが一番大切なことなのではないかなと思いました。

最近テレビのニュースを見ていて思うことがあります。ラインや X などの SNS での誹謗中傷です。誹謗中傷をする人は、互いの違いを認めようとしないから、人を傷つけるような行動をしてしまうのではないかと思います。

世界では戦争も起こっています。戦争も、他の人たちとの違いをしっかりと理解していれば起こらないと思います。

世界中の人々が一人一人の違いを理解出来れば、人権は守られ、世界が平和になり、幸せに暮らせるようになると思います。

ぼくも、今回の経験を活かし、より良い社会になるように互いの違いを理解して、たくさんの人たちと関わっていきたいです。



**近江八幡市人権尊重のまちづくり推進協議会事務局**

**近江八幡市市民部 人権・市民生活課**

**〒523-8501 近江八幡市桜宮町 236**

**TEL 0748-36-5881**

**FAX 0748-36-5882**

**MAIL 011402@city.omihachiman.lg.jp**